

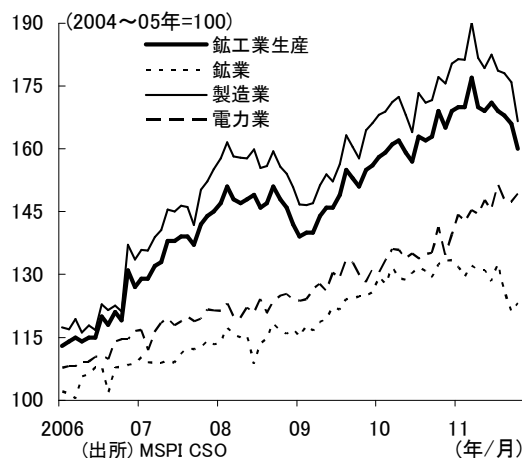


10月インド鉱工業生産が大幅減

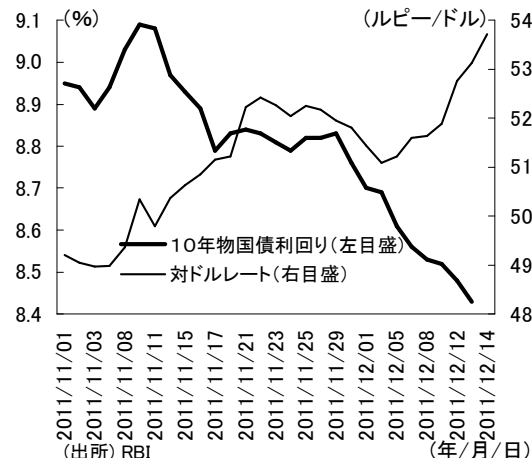
～ 11月から反転増加の公算大 ～

- (1) インド経済で先行き不透明感が急速に増大。本年7～9月期の成長率鈍化に続いて、10月の鉱工業生産が大幅屈折（図表1）。前年比で▲5.1%、季調済前月比で▲3.6%。さらに直近ピーク比の下落率は▲9.6%に達し、リーマン・ショック後の落ち込みを凌駕。仮に11～12月が10月と同値とすれば10～12月期の鉱工業生産は前期比▲4.6%。同▲1.4%の7～9月期のみならず、リーマン・ショック直後の2009年1～3月期同▲3.9%を上回る減少に。
- (2) 先行き懸念の増大を受け、7～9月期成長率が発表された先月末から金利低下。10年物国債利回りは前月の8.8%水準から12月13日8.4%へ（図表2）。一方、為替市場ではルピー売りが進行。1ドル当たりルピー相場は今月初の51.1を底に9日51.9とほぼ先月水準まで戻った後、10月の鉱工業生産が発表された12日から大幅なルピー売り。14日には53.7へ。
- (3) しかし生産動向と連動する電力需要、さらに生産動向に先行する鉄道貨物輸送量をみると、持ち直しの兆し（図表3）。電力需要量は本年に入り年央まで一進一退で推移した後、7月以降増勢へ。鉄道貨物輸送量は9月大幅減の後、10月から急回復。いずれも11月が既往最高。
- (4) 10月の生産減は品目別にみると自動車为主因。総販売台数は季調済年率で9月の2,076台から10月1,822台へ前月比▲12.3%減少した後、11月2,172万台と同19.2%増加し、過去最多を更新（図表4）。種類別にみると、二輪車の増勢が際立つ展開。乗用車が昨秋以降、弱含んだ後、11月再び増勢に転じたのに対して、二輪車は本年10月の落ち込みを除くと、09年来趨勢的増勢を持続。原動力は未熟練労働力をはじめ所得・雇用環境の改善傾向が、とりわけ地方圏を中心に本年に入り、このところ一段と加速した情勢変化。さらに、ルピー安に伴う輸出競争力強化を加味すれば、生産活動は11月以降、回復軌道へ復帰する公算大。

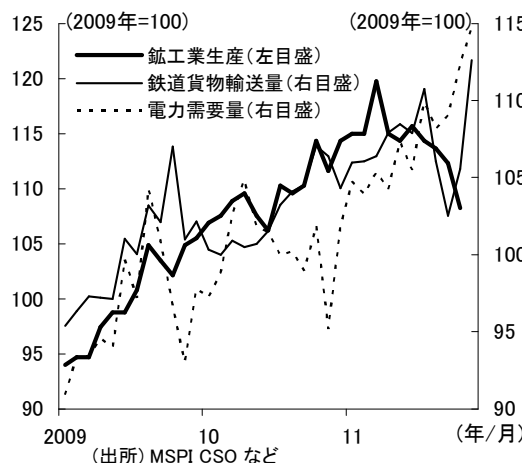
（図表1）インドの鉱工業生産（季調済）



（図表2）為替相場と国債利回り



（図表3）鉱工業生産と鉄道貨物、電力需要（季調済）



（図表4）自動車総販売台数（季調済）

